

ケン・キージー 原作

デール・ワッサーマン 脚色

小沢撓謳 訳

永妻晃 上演台本

スポットの中に男が居る。

チーフ「パパ、奴らはまた霧きりを送って来る。見られたくないことが起こるからなんだ。霧はこれから奴らがしようとするひどいことを隠してしまう。奴らは人間を、奴ら好みの形に変えてしまうんだ……」

照明が広がると数人の患者がいる。

ホイッスルの音。

一同、入口に集中する。

ミス・ラチエッドが入って来る。四十前後の一種奇妙な完璧な仕草。

ラチエッド「さあみなさん、(いるであろう看護人たちに)月曜日ゆうようって憂鬱ゆううつね。いつも仕事が山のようにあつて……ワシントン、先ずブロムデンさんの髭ひげをそってあげなさい。ウィリアム。あなたは病室のシーツを替えなきゃ駄目よ。さあ、さつさとはじめて」

看護師のフリンが走って来る。平凡な若い女性で、おどおどした眼をしており、首にかけている十字架をさわり続けている。

フリン「(息荒く)お早うございます。ミス・ラチエッド」

ラチエッドは腕時計を見る。

フリン「遅れてすいません。夜のおミサで遅くなってしまつて。

それであたし……」

ラチエッド「(微笑んで)いいのよ。さあ仕事にかかりましょう」

フリン「はい、ミス・ラチエッド」

フリンはコントロール・ルームの中でリストを見ながら錠剤を紙製の小さなコップにいれ、ラチエッドは配電盤を操作し、マイクを取る。彼女の声がスピーカーを通して、広間と病室に鳴り響く。

ラチェット「それではお薬の時間です。皆さん、お薬ですよ。  
（と言ってからマイクを切り、広間に出て来て患者  
の面倒を見る。患者たちが病室から出て来ると、熱  
っぽく明るく）御機嫌よう、ビリー。御機嫌よう、  
ハーディングさん」

ハーディング「どうして機嫌がいいかわかるんだい」  
ビリーはラチェットから遠ざかる。ハーディングは、  
フリンの方に近づく。彼は四十歳位のハンサムで、  
エレガントで優雅な手の動きを意識的にしようとし  
ている。ラチェットが錠剤をハーディング渡すと、  
彼はミサの儀式の様に、錠剤と紙コップを両手に持  
ってささげる。

ハーディング「神よ、我々に静けさを与えたまえ、この錠剤  
を感謝したてまつる」

ラチェット「錠剤と紙コップをビリーに持って来て、熱っぽく  
おはよう、ビリー」

ビリー「三十歳に手の届きそうな青年だが、それより若く見え  
る。不安げな表情をし、態度は神経質である。吃音）お、  
おはおよう、ミ、ミ、ミス・ラチェット」

ラチェット「（愛情深く）ビリー、お母様と夕べお話しましたよ」  
ビリー「な、なにをお母さんにい、言ったんですか？」

ラチェット「（ビリーの腕の包帯を示して）後悔してるって……  
もう二度としないって私と約束したってことをね」

ビリー「（感謝して）あ、ありがとう、ミス・ラチェット」  
ラチェット「（明るく）お早う、スカンロンさん」

スカンロンは何も答えない。五十歳位で禿げている。  
腕に抱えている箱の中にある“機械”というもの  
に熱中し始める。チェズウィックは小柄で小太りで、  
頭髪は短く刈っていて、はにかんだり卑屈になった  
りする。彼は怒ったペンギンのようにコントロー  
ル・ルームに近づく、フリンが渡した錠剤を調べる。

チェズウィック「ちよと可愛い子ちゃん、こりや何だい？」  
フリン「錠剤です」

チェズウィック「そんな事わかつとる。どんな種類か聞いてん

だよ」

フリン「(媚をうって) さあ、早くお飲みなさいなチーズウィックさん。私のために」

チーズウィック「そりゃ駄目だ。俺が知りたいのは……」

ラチェッド「結構よ、チャールズ」

チーズウィック「何が結構だ、こいつが俺を病気にするんだぞ」

ラチェッド「……無理して飲まなくてもいいのよ」

チーズウィック「(狼狽してから失望して) 無理して飲まなくて

も……?」

ラチェッド「(微笑みながら) そうよ。気に入らなければね」

チーズウィックは一瞬考えてからすぐに錠剤を飲み込む。

小柄なイタリア系のマーティニが部屋に飛び込んで来る。元気でちっともじっとしていないが眼が輝いている。

ラチェッド「お早う、マーティニさん」

マーティニ「(虚空に向かって) はいよ」

マーティニはフリンの方に行き、錠剤と水を飲む。

フレデリックスは中年にさしかかった年頃。

フレデリックス「(紙コップへ手を伸ばしながら、フリンに) シーフェルトの分、俺に頂戴よ、あいつに渡してやるからさ」

ラチェッド「ちよつと待って、フレデリックスさん。あなたがシーフェルトさんの分まで飲んでいるのを、私が知らないと思っっているんでしょうか」

フレデリックス「そんなこと言ったって、薬は奴の体に悪いんだよ」

ラチェッド「良くなるために、時には前より悪くなることもあるんですよ」

フレデリックスは黙る。

ラチェッド「フリン、今日新しい患者さんが来ますから、受付まで行ってお迎えしてね」

フリン「判りました、ミス・ラチェッド」

と言って出て行くこうとする。

ラチェッド「あ、フリン私は事務所にいますから」

フリン、頷いて出てゆく。

ラチエツド「(患者に)おとなしくしているのよ、皆さん」

ラチエツド、去る。

チエズウィック「(真似て)おとなしくしているのよ、皆さん。

畜生。俺たちに選択の自由がるような事言いやがる」

ハーディング「我が精神病患者同志諸君、患者委員会の委員長として、治療の為に十分間の静かな素晴らしい沈黙を提案する」

一同沈黙。

その沈黙がキンキンした声によって中断される。

奥から、マクマーファイが来る。

マクマーファイ「そっちが間違ってるんだって言っただろう。俺は強制されてはいないんだ。俺のパンチをくらわす前に、その体温計をしまっちなえよ」

ボクシングをしている型で、客に背を向けながら登場。かんかんになっているフリンがついてくる。振り向いたマクマーファイは、広間にいる患者たちが自分を眺めているのに気づく。

マクマーファイ「やあ皆、元気でやってるかい？」

マクマーファイは長髪で長い脚をしている。悪魔的笑いとたくましい容姿。鼻と頬骨に傷跡がある。殆ど被ったままである黒いオートバイ乗りの制帽を被っている。古いチャの皮のジャンパーを着、洗いだらしで殆ど白に近くなったジーンズをはき、樵夫きこりの長靴のようなものの中に、ジーンズの先を突っ込んでいる。開放的でないながら抜け目のない雰囲気は、患者たちに少なからずショックを与えたようである。

フリン「(マクマーファイに)あんが、ちよつと聞きなさいよ」

マクマーファイ「放っておいてくれ。俺の新しい城を調べる時間ぐらいくれよ。こんなとこ初めてなんだから」

患者たちマクマーファイを無視する。

マクマーファイ、一同に、

「俺に何があったか知ってるかい、え、皆？ 強制農場で

一、二度、ちょっときつい喧嘩をしちまったのよ。つか  
まっちまってさ、判事さんが俺のことを精神異常だってお  
おせになった」

フリン「ここには規則があるんです。あなたの体温を計らなけ  
りやならないの。それからシャワーを浴びて制服に着替え  
て下さい」

マクマーフィー「いいか、俺を放つときな……一歩でも近づいた  
らどうなるか」

フリン「……（態度が一変）お前が売った喧嘩だぜ。覚えてろ  
よ」

フリン、遠ざかり部屋から出て行く。

マクマーフィー「ははーん……さてと、大事なことを解決しとか  
ないとな、この中の誰が迷える子羊たちを率いているんだ  
い。（男たちは理解が出来ないで顔を見合す）誰が欠陥人間  
のボスなんだ？」

ビリー「ぼ、僕じゃないです」

マクマーフィー「そ、そ、そうかい、このしまがどうなってるか  
知りたいんだ。今誰がボスか言ってくれ」

ビリー「ハーディングさん、あなたは、か、か、患者委員会の  
委員長でしょう」

ハーディング「（偉そうに）その方は、面会の予約があるのかね」  
ビリー「マクマーフィーさん、よ、予約がありますか？ ハーデ  
ィングさんはとても忙しいんです」

マクマーフィー「（映画のカウボーイを真似て）ビリー、忙しいハ  
ーディングさんに、マクマーフィーが今すぐ会いたいって言  
ってくれ。奴と男同志の話がしてえんだ」

マクマーフィー、用心棒が拳銃を抜く構えをして、  
「何しろ俺たちのうちどっちかが、日暮れ前に、この町を  
出なけりゃならねんだからな」

ハーディング「（マクマーフィーのマネをして）ビリー、その向う  
見ずの男に言ってくれ、決闘はいつでも受けてやるってな」  
マクマーフィー「（ハーディングに近づき）ビリー、このマクマー  
フィー様は何処でも一番なんだ、どんな時でもな。そう言っ  
てやれ。ボスずらしやがると頭に来るとな」

睨みあう、二人。

ハーディング、拳銃を抜く仕草をするかと思うとその手お延ばしてマクマーフィーに握手をする。

ハーディング「(にっこりして) こんにちは、ボス」

マクマーフィー、ちよつと当てが外れる。

チェズウィック「煙草あるかい、ボス」

マクマーフィ「あるぜ、さあ握手だ」

マクマーフィ、スカンロンに握手を求める。

マクマーフィ「こんちわ、じいさん」

スカンロン「飛び上がって箱を守る」気をつけろ！」

マクマーフィ「箱を見て）何をしてんだい？」

スカンロン「そっと打ち明けるように）爆弾さ。このいやらし

い世界をぶっとばしてやるんだ」

マクマーフィ「競争相手はいっぱいいるぜ」

マクマーフィ、チーフに気づき、

「あれあれ、こりや何てこった？」

チェズウィック「そいつはチーフ・ボロムデン」

マクマーフィ「どうしたんだ大酋長、話してくれ」

ビリー「奴は、き、き、聞こえないんだ」

マクマーフィ「何でやつらはお前さんを縛ったりしたんだ。（と

ひもをはずしはじめ）人間の尊厳がなくなっちゃまうぜ。

気に入らねえな。（ひもをほどき）さあお前は自由だ……（ビ

リーに）奴は何処の部落だ？」

ビリー「し、知らないよ。お、俺が来た時はもういたから」

ハーディング「医者によるとコロンビア河がわの上流に住んでいる

インデアンドさうだ。部落は消滅したということだ」

マクマーフィ「お前さんはモヒカン族の最後、ってとこなんだ

な」

チェズウィック「あんたの言ってることなんかちつとも聞こえ

ちゃいないよ」

ラチェッドがウィリアムとワシントンを従えて入っ

て来る。

ラチェッド「（マクマーフィに手を出し）マクマーフィさん。私

はラチェッド婦長です。よろしかったら、それを私に下さ

らない。（マクマーフィの手からひもを取り上げ、ワシント

ンに渡す）ウィリアムさんが言うように、あなたはとって

も難しい人なんですってね」

マクマーフィ「（心痛したような振りをしてウィリアムの頬を軽

く叩く）俺が難しいって？」

ラチエッド「入院後、義務としてとらなければならないシャワーを拒否したでしょう」

マクマーフィ「ちよつと婦長さん、シャワーにつきましてはね、今朝裁判所で一回、牢屋で一回とられました。それに重ねて申し上げますと、彼らにごしごしこすられましたね。

両耳や他の所なんか、もぎとられそうな勢いでした」

マクマーフィ、わつと笑いだす。患者の中にも笑いだすものがあるが、ラチエッドの目に合つてすぐ黙る。

ラチエッド「面白いわね。マクマーフィさん、私たちの規則は、あなたが完治するのを助けるために出来ているんですから、協力して頂かなくては」

マクマーフィ「おかしいってのはこの事さ、皆がいつも俺に規則のことを言う時にや、俺はいつも一つの事しか考えない時なんだ。ちよつど逆の事をしようかね」

ラチエッド「……皆さん、集会の時間です。ミーティングですよ。

マクマーフィ「何やるんだ。婦長が歌うのか？」

ハーディング「集団療法さ。毎日同じ時間にやるんだ」

長い間。

ラチエッド「さあて、誰も口火を切りたくないのかしら」

ラチエッドはもじもじして、居心地悪そうなビリーを凝視する

ビリー「腕の包帯を見せて」た、たぶん、ぼ、ぼくがこのことを話さなけりやいけないんだ。そ、そ、それはお母さんのせなんだ。いつも僕に会いに来る時、ぼ、ぼ、ぼくがつくりしちやうんだ」

ラチエッド「お母さんはあなたをとつてもとつても愛してらっしゃるのよ、ビリーちゃん」

スカンロン「ビリーちゃん、ビリビリビリーちゃん。あなたのいとしいママは、あなたをとつてもとつても愛しているのよ」

ビリー「(スカンロンを見ないで) そんなこと、し、し、知っているよ。だから大変なんだ。だって、ぼくはいつもお母さん



を失望させるんだ。い、いつも、でも、お母さんは、それ  
をみ、み、見ないんだ。ぼ、僕の本当の姿を見たくない、な  
いんだ。ぼ、僕はいつも言うんだ、ママ、僕はまともじゃ  
ないんだって、ぼ、僕は病気だって」

ラチェッド「ビリー、あなたは自分の罪悪感でママを罰しよう  
としているのだって考えた事はなあい？」

ビリー「も、もちろん考えたさ……ミス・ラチェッド、お、  
お願いです。き、今日は他の人の事は、話すわけにはい  
きませんか」

ラチェッド「現実を直視することを勉強しなけりゃいけないの  
よ、ビリー」

ビリーは顔をそむける。ラチェッドは待っているが、  
「結構結構。(患者日誌を開く) 金曜日は、散開する前に、  
ハーディングさんの奥様の事を話していたんだったわね。  
ハーディングさんと奥さんの関係についてお話ししましよ  
う」

マーティニ「誰の奥さん？ ああそう。そこにいる」  
マクマーフィー「どこない？」

マーティニ「(虚空を指して) ほら、あそこに……」

マクマーフィー「お前さんの目を持つにや、どうすりゃいいんだ」  
ラチェッド「続けましょう。患者日誌に皆さんが書いたことに  
よると」

その時、スパイビー医師が入って来る。精神病の臨  
床医である。若くて平凡んで冗談も言えない、小心  
そうな人物だ。

ラチェッド、チラリと腕時計を見ると、  
「いらして頂いて嬉しいわ、先生」

スパイビー「すまん、本当にすまん……」

と臆病そうにあやまる動作をしてから、視線を床に  
落とす。が、マクマーフィーに気づく。その視線をラ  
チェッドに向ける。

ラチェッド「マクマーフィー・パトリック。三十一歳。独身。軍  
隊において、命令不服従の罪により隊より放逐。市民生活  
に戻った後、喧嘩、暴挙、脅迫、泥酔、騒乱、賭博常習及

び強姦……」

患者数人「強姦？」

ラチェッド「それも、未成年の……」

マクマーフィー「あの娘は十九だつて言つてたぜ！」

ラチェッド「裁判所はその可愛そうな少女を……」

マクマーフィー「可哀そうな少女だつて」

ラチェッド「少女は証言を拒否。被告は裁判の後町を離れた」

マクマーフィー「もし逃げなけりや、あの売女は……」

ラチェッド「(さへぎつて) 新しい患者です。先生」

と、手に持った書類をスパイビー医師に渡す。

医師は書類に目を通し、

「君は他の施設には？」

ラチェッド「いました。警察に監獄、国の強制農場……」

マクマーフィー「しかし、精神病の施設は……」

スパイビー「はじめてだね」

マクマーフィー「へい、先生！ でも俺は気違いだ。クルクルパ

ア。農場の先生がね」

と、医師の持つ書類を指し、

「ここ。『アブノーマル行為の過多及び多発は、患者が精神異常者であることを示唆している』……ね」

スパイビー「(ラチェッドの方を向き) この所に興味があるんです。『患者が厚生農場のつらい強制労働から逃れる為に、精神異常を装っている可能性を見落としてはならない』どうでしょう、マクマーフィー……」

と、マクマーフィーに向き直る寸前、マクマーフィーは帽子を逆さにかぶり、頓狂な顔をして両手を広げ、

「俺がまともに見えますかね」

ラチェッド「先生、マクマーフィーさんにミーティングの規約を

教えてあげて下さい」

スパイビー「治療共同体」

マクマーフィー「何ですって？」

スパイビー「病院は一つの社会。つまり実際の社会の縮図。何故ならば、社会は常に誰が正気で誰が正気でないかを決定

してきた。君たちは我々の意見に従って貰わねばならない」

チーフが前に出る。

一同は客席を背にして立つ。

チーフ『新入りがやって来たよ、パパ。彼は服従しなければなら  
ないんだ。奴らは一人一人ひもでつないで、頭や脳味噌  
に歯車や電極を埋め込むんだ』

一同の中から、ラチェッドが振り返り、

「結構です。もし皆さんが何も言うことがなければ……」

マクマーファイが振り返る。

マクマーファイ「俺はもう少し言いたいことが……」

一同、振り返る。

ラチェッド「スパイビー先生。このミーティングは治療の為だ  
けのもので、詳細はあまり重要じゃないと言って……」

マクマーファイ「重要じゃない！ ワールドシリーズが何故重要  
じゃないって言うの？」

ラチェッド「ワールドシリーズ？」

マクマーファイ「野球ですよ。金曜の午後にはじまる……でもあ  
なたの最低の規則によると、テレビは夜しか見られない。

ねえ、先生。午後に変えましょうよ？」

ラチェッド「治療の為ですか、それとも試合の賭けをしたい為  
かしら？」

マクマーファイ「(他の連中に) さあ皆、ワールドシリーズを観た  
くないのか？」

チエズウィック「観たい」

マクマーファイ「スカンロンは？」

スカンロン「(困って) あまりよく判らない」

ラチェッド「私の記憶が確かなら、あなた、最近三日間の飯ス  
トをしましたね。夕方のテレビを六時半ではなく六時に点  
ける為に」

マクマーファイ「さあ民主主義万歳だ。投票しようぜ。試合を観  
たい奴は手をあげるんだ」

と、マクマーファイ手をあげる。スカンロンとチエ  
ズウィックもあげる。他は床に眼を落とす。

マクマーファイ「どうしたってんだ。おまえさんたちは意思がね

えのか、さあ、ハーディング、投票だ！」

ラチエッド「たったの三票ね、マクマーフィーさん。規則を変え  
るには不充分ね。そろそろミーティングを切り上げましょ  
うか」

マクマーフィーは憤慨して不愉快になる。ラチエツ  
ドとスパイビーは出て行く。

ビリーがマクマーフィーに近づき、

「ねえ、ここにいる皆のな、中には、ず、ず、ずっと前か  
らい、い、居るのもいるし、あんたが、で、出て行ってし  
まった後でも未だここに、い、居るっていうのもいるんだ。  
ワールドシリーズが終わっちゃった後にも、まだ居るんだ。

判るだろ」

マクマーフィー「怒りに狂った風に」さっぱり判らねえよ！ ハ

ーディング、皆はどうしたってんだ？」

フレデリック「(歯の間から)彼女はいつ物事をぶちこわしてし  
まうんだ」

マクマーフィー「(爆発して)のろまのなめくじ野郎！ お前たち  
をあゝの馬鹿女にまかせてずらかりたいよ。そうさ、ここか  
ら逃げるんだ、ぐずぐずしないでな！」

フレデリックス「へえ？ そうかい。そんなにホラ吹くなら、  
どうやってここを逃げるか聞こうじゃなえか」

マクマーフィー「逃げ方はたとあるさ」

フレデリックス「椅子で窓をぶっこわすのさ」

ビリー「(嘲って)や、や、やってごらんよ」

チェズウィック「馬鹿なことを言うなよ、マック。椅子ぐらい  
じゃ歯がたたねえよ」

マクマーフィー「ようし。じゃもっと重いもんでやったらどうだ。  
看護師でも投げつけるか」

ハーディング「そりゃ、柔らかすぎるよ。格子にぶつかりゃ、  
看護師がさいの目になっちゃう」

マクマーフィー「俺がホラを吹いているっと思っただな。えっ。  
(何か探してる風に廻りを見る)あれだ。箱だ。あいつを  
窓にぶっつけてやる。鉄格子に突っ込んで穴をあけちゃう  
んだ」

フレデリックス「そんなことだと思ったよ」

ハーディング「あれは釘付けされてんだぜ」

マクマーフィー「つてことは、俺があ箱を動かせないって言い  
たいのか？」

ハーディング「あの箱はコントロール・ルームの電源が全部入  
ってるんだから。二百キロ近くあるんだせ。コード・トラ  
ンスとかがな」

スカンロン「(興奮して) やれよ、マック！ やってみろよ。こ  
の汚い病院を吹っ飛ばしてくれ！」

マクマーフィー「見てろよ！」

チェズウィック「マック、馬鹿なことは止めろよ」

マクマーフィー「五ドル掛けるか。さあ、パアども、五ドルだ！ 何  
かを試してみる前に、出来ないなんて言うのは納得出来ね  
えんだ。さあ、よいよい野郎。ポーカーの借金の証文だ。  
(と金をテーブルの上に投げる) 全部かけるぞ」

フレデリックス「やるぞ！」

チェズウィック「俺もだ！」

マーティニ「いいぞ！」

マクマーフィーは箱の方に行く。

他の連中が取り巻く。

マクマーフィー「下がってる、皆。スカンロン、女子供を安全な  
所に避難させろ！」

と言ってから、しっかりと身体を支える場所を探  
す。

チェズウィック「もしかすると、奴はやっちゃうかもしれないぞ」

フレデリックス「そうとも、奴はやるぜ」

ハーディング「奴のもうけはヘルニアだけさ」

マクマーフィー「かけるか？」

ハーディング「お前の金めえを盗むようなもんだからな」

マクマーフィー「じゃ下がってるよ」

マクマーフィーは力を入れる。箱を持ち上げようと  
するが、なかなか重いので手を離す。

フレデリックス「諦あきらめたか」

マクマーフィー「いいや、ウォーミング・アップだ。よし今度が

本番だぞ！」

と箱にとりすぎる。全力をあげる。筋肉という筋肉がひきつり首をそらして身体全部が震える。

チーフが椅子から立ち上がり、マクマーフィの催眠術のかかったように、一種異様に、類似的に筋肉を動かしながらゆっくりとマクマーフィに近づく。が、マクマーフィは突然箱を離して崩れ落ちる。マクマーフィの激しい息づかい。次に立ち上がり苦しげに病室の方へ行く。

ハーディング「マック」

マクマーフィは止まる。

ハーディング「世界中の誰も持ちあがられやしないんだ」

マクマーフィ「(振り向いた彼の眼に怒りと涙がたまっている) だがな、俺は少なくともやってみた。判るか、やったんだ」と病室に入っていく。

チーフが手を伸ばし後を追う。がその足を止める。チーフにスポット。

チーフ「僕は彼の肩に手をかけたかった。さわりたかった。だって彼こそ人間なんだ。パパみたいな、昔のパパみたいな」

そこに、キャンディ・スターが入って来る。健康的でセクシーで小柄な美少女である。髪は肩にかかり、濃いメイク・アップをしている。

ワシントン「マクマーフィに面会だ」

マクマーフィ出て来る。

キャンディ「パトリック」

マクマーフィ「キャンディ！」

キャンディ「会いに来たよ！」

マクマーフィ「俺のでっかい小猫ちゃん」

キャンディ「私のミケちゃん」

二人、抱き合おうとするが、

ワシントン「ストップ、院内では淫みだらな行為は違反とみなしま

す」

ラチェッド「マクマーフィさん、面会の方の身元を証明して下

さい」

マクマーフィ「俺のおいぼれのオフクロだ。皆、キャンディ・スターっていうんだ」

キャンディ「(一同に向かって)ねえ皆、うまくやってるかい。(スカンロンに)おとつつあん、何でここに放りこまれての?」

スカンロン「強姦だ」

キャンディ「やるね、おとつつあん」

マクマーフィ「こいつがビリーだ。〇〇歳だ。まだ童貞」

キャンディ「心配しなくて大丈夫よ、外からじゃ判らないもん」

マクマーフィ「サンディは元気かい?」

キャンディ「結婚しちやったのよ」

マクマーフィ「結婚、サンディが誰と?」

キャンディ「アーティよ。ほら、いつもパーティーで悪戯いたずらしてた人。蛇とかネズミとか持って来てさあ。本当の気違い……(はっと気づいてビリーに眼を向ける)」

ビリー「ああ、い、い、いいんだよ」

マクマーフィ「そうさ。外の奴らの方がもっと狂ってるからな……おう、おう!」

キャンディ「どうしたのよ?」

マクマーフィはキャンディを部屋の隅につれて行き、囁く。

「キャンディ、俺に最高のアイデアがあるんだ。ヤッホー」

キャンディ「何よ?」

患者たちは二人にぴったりとくっついて話を聞いている。

マクマーフィ「……ここでパーティーをしようと思うんだが、お前も来いよ。そうさ、サンディも連れて来い」

キャンディ「サンディは結婚したって言ったでしょう」

マクマーフィ「だからって遊んじゃいけないって訳でもないだろう」

キャンディ「そりやそうだけど、でもどうやって入って来るのよ?」

マクマーフィはキャンディを更に部屋の奥に連れ

て行く。患者たちもぞろぞろと従い、マクマーフ  
イとキャンディを取り囲む形となる。

その、患者たちを割ってキャンディが飛び出し、  
「最高よ。早くやりたいわ」

ラチエツド「マクマーフイさん、時間です。面会の方にお願  
いしてお帰り頂くように」

キャンディ「あの女なんだったっていうの。来たばかりじゃない」  
マクマーフイ「ベイビー。この方たちにさよならの挨拶をしな。

良い子だ」

キャンディ、一同にさよならを言ってからラチエ  
ツドに伴われて出て行く。

ビリー「ほ、ほ、本当にやる気かい」

マクマーフイ「やらないでか」

スカンロン「ここで？」

マクマーフイ「最高の祭りまつをな」

ビリー「キャンディも一緒に？」

マクマーフイ「あいつと喋しゃべってみないか？」

ビリー「な、な、何いつてるんだ」

ハーディング「奴に精神病医学会のオスカーを与えるべきだ」

マーティニ「パーティだ、本当にやるんだ！」

マクマーフイ「(はぐらかして) おい、やるって誰が？」

マーティニ「俺たちだろ？」

マクマーフイ「(はぐらかして) 俺たち？」

ハーディング「俺たちは招待されないのかい？」

マクマーフイ「そうさ」

マーティニ「(がっかりして) なぜだい？」

マクマーフイ「なぜって、俺はお前さんたちはもう沢山なんだ。

あの牝豚めすぶたの前でふるえあがっちゃうじゃねえか。今、テレ  
ビで何をやってるか知ってるかい。ワールドシリーズだぜ。

ワールドシリーズ！ だが俺は、お前たちのお陰で観れな  
いんだ。こしぬけども！」

チエズウィック「でも、俺は手をあげたぜ」

マクマーフイ「あんたとスカンロンはそうさ。でも他のクルク  
ルペアは手をあげるにはケツの穴が小さすぎた」



ハーディング「悪かったよ、マクマーフィー。今度投票すればきつと……」

ラチェッド来る。

ラチェッド「何もすることがないんですか、皆さん」

マクマーフィー「ミーティングをしているんです。患者の特別委員会」

ラチェッド「誰の要請によってなの？」

マクマーフィー「委員長デール・ハーディング氏により」

ハーディングは躊躇するが、ラチェッドが彼を見るので、

「その通り」

ラチェッド「何の目的で？」

ハーディング「も、も、も、目的、目的は……」

ビリー、ハーディングの吃音に驚いて啞然と見る。

マクマーフィー「目的ってのは、テレビの時間を午後にかえらるってことを、再投票するってことですよ」

ラチェッド「ああそうですか」

マクマーフィー「さあ皆、いいか……」

ラチェッド「ちよつと待つて。マクマーフィーさんは彼自身の考えを皆さんにおしつけようとしているんですよ。彼に他の所に行ってもらった方が、あなたたちはずっと幸せになると思えますけど」

スカンロン「彼を兇暴性患者きょうぼうせいしかんじやの所になんかいかせやしないで。

彼は二度目の投票をやらうとしただけだ」

ラチェッド「(マクマーフィーに)再投票をすれば本当に満足がいくの？」

マクマーフィー「俺はもう一度、あんたに洗脳されちまったこの変人たちに根性があるってことを見たいのさ」

チェズウィック「投票だ！」

一同「(ビリー以外)投票！」

ラチェッド「結構。テレビの時間を変えたい人は手をあげて」

ビリー以外挙手する。

マクマーフィー「ビリー、お前は？」

ビリー「ぼ、ぼ、ぼ僕は……」

フレデリックス「どうしたビリー、手をあげるんだ！」

ビリー、ゆっくり手をあげる。

マクマーフィー「やったぞ！」

ラチェッド「ちよっと待ちなさい。八人しかないやないですか」

マクマーフィー「八人で全部だろうか？」

ラチェッド「規則では四分の三の賛成票が必要となっています」

マクマーフィー「規則？ 慢性患者も投票しなきゃいけないって  
いうのか？」

患者たち、押し黙る。

マクマーフィー「そうかい。こうなってるんのかい。あんたたち民

主主義つてのは。くさりやがって」

ラチェッド「ミーティングは終了しました」

マクマーフィー「熱っぽく」ちよっと見ていろつて。(慢性患者

の方へ・無対象の人物に走り寄り) お前どうだ？ え、相

棒？ ワールドシリーズ観たくないのか？ (別の人に)

お前、野球だよ。観たいだろ？ 手をあげるよな」

ラチェッド「(微笑しながら) ミーティングは終了したと言っ  
てるんですよ」

マクマーフィー「誰か、あと一人でいいんだ。えいッ、畜生！ マ

ダムソン大佐、あと一票でいいんだ。手をあげるよ。あの

女にガッツのあるところを見せてくれ！ (別の人物

に) 頼む。お前さんが頼りだ」

マクマーフィーの視覚にチーフが入る。

マクマーフィー「(さらに熱っぽく) ちよっとみていろよ。(チー

フに近づき) チーフ、いいか、チーフ聞くんだけ！ 皆が人

間だつてことを証明する千載一遇せんざいいちぐうのチャンスなんだ。ゾン

ビーでも飼いなされた羊でもない人間だつていう。こい

つは勝たなけりやならない戦たたかいなんだ。手をあげてくれ！

投票してくれ！ 頼む！ さあ！」

ラチェッド「馬鹿なことはおやめなさい、マクマーフィーさん。

この人は可哀相にあなたの言ってることは聞えやしないん  
ですから」

マクマーフィー「チーフ、チーフ、やれよ。手をあげる、投票だ」

全員の視線がチーフにそそがれる。しばしあつてマクマーフィは諦める。マクマーフィは帽子を床に叩きつけると。ロックキング・チェアに座る。他の連中は各自の仕事にもどる。ラチェッドはコントロール・ルームの戻ろうとする。

その時、非常にゆっくりとチーフが苦勞しながら手をあげはじめ。仕事をしていたチェズウィックが顔をあげた時、チーフの動きが眼に入る。

チェズウィック「マック、マック、見ろよ」

ワシントン「(見て)ミス・ラチェッド、チーフが、見て下さい。

チーフが……」

マクマーフィはチーフを見て飛び上がらんばかりに喜ぶ。

マクマーフィ「やったぞ。投票した。チーフが投票した。四分の三だ！」

マクマーフィはチーフの所に行き、テレビの前に連れて行こうとする。

マクマーフィ「ナーティニ、テレビのスイッチを入れてくれ。

さあ、その席をあける大酋長プロムデン、ビック・チーフは来賓席らいひんせきに座る権利がある」

一同、テレビの前に行く。

ラチェッドが配電盤のスイッチを回す。突如、テレビが消える。

チェズウィック「あの女が切ったんだ」

マクマーフィ「(怒りに狂って帽子をコントロール・ルームに投げる) そんな権利はないぞ。全員投票したんだ」

ハーディング「落ちつけよ、マック」

ラチェッド「プロムデンさんが手をあげた時には投票は終了していました。さあ仕事に戻りなさい、皆さん」

男たちは躊躇する。

ビリーはテレビから離れる。

マクマーフィ「(断固として) 動くなビリー。座ってる」

ラチェッド「私の言ったことが聞けなかつたのですか」

マクマーフィは一同を見まわして、テレビに向き

直り。突然。

マクマーフィ「さあ皆、見ろよ。いいところだ。丁度いいところだぞ！」

ハーディング「(マクマーフィの態度を見て驚くが、その行動を理解して) 走れ、行け、走るんだ！ もっと早く、もっと早く！」

スカンロン「(仲間に入って) エラーだ。球が遠すぎたぞ！」

マクマーフィ「さあ続けろ、続けろ！」

マーティニ「二塁打だ！ 気をつけろ！」

他の連中もエキサイトする。

チエズウィック「スリーベース、スリーベース！」

ラチェッド、テレビと一同の前に立ち、

「止めなさい。……すぐ止めるんです。命令です。止めなさい。皆は私の統制の下にいるんですよ」

マクマーフィ「行け行け！ ゴーゴー！」

ハーディング「エラーしたぞ」

フレデリックス「外野まで行ったぞ！」

一同「アアアア」

ビリー「ほ、ほかのや、やつがカバーしたぞ」

スカンロン「とるぞ。いや駄目だ」

ラチェッド「皆さん、止めなさい！ ハーディングさん、チエ

ズウィックさん！ 止めるように命令します。あなたがた

ちは私の支配下にいるんです」

ラチェッドの声は皆の叫びで消されてしまう。

マクマーフィ「(騒ぎを制して) よう、ビルだ。よく冷えたビ

ールを持って来い！ それにホットドックだ！」

チエズウィック「ホームラン！」

全員凱歌をあげる。

——ホイッスルが鳴る。

一同、バスケット・ボール。

マクマーフィがホイッスルを吹きコーチながらコーチしている。

箱の上に乗った、ラックリーの腕が作っているバ

スケルトの中に、球が二、三回入る。  
皆がうれしそうに叫ぶ。

マクマーフィ「ボールをパスしろ。広がれ。肘ひじを使うんだ。さあやれ、おたんこなす。入れる！ 入れる！（ラックリ―はボールを掴んでしまう。マクマーフィはホイッスルを鳴らしボールを落とす）ラックリ―、籠かごはボールをつかまえないんだ」

一同は円陣を作りボールをパスする。  
ボールがマーティニに渡った時、彼は幻の人の所にパスをする。

マーティニ「ジョージ、取れよ」

マクマーフィ「ホイッスルを鳴らしマーティニの所に行く）チーフには五人しかいないんだぞ。一人、二人、三人、四人、五人、判ったろ？ 幻覚の時間じゃないんだよ、マーティニ、（とボールを拾ったチーフからボールを受け取る）ありがとうよ、チーフ」

チーフにスポット。

チーフ「（佇みながら耳を傾ける）ああ……滝だ。どうして聞こえるのかな、パパ。ずっと遠くだし、昔に聞いた音だつて言うのに、聞こえるんだ。ああ雪の匂い。パパ。見えるよ、パパ。部落の皆が。ほら、滝の上に。魚を突き刺す度に、叫んでいるあの声を聞いてごらんよ。どうしてなんだ、パパ？ みんな僕が子供の時になくなった世界じゃないか……どうして、こんな風に思い出すんだろう？」

バスケット・ボールが続く。

ウィリアムが入って来る。

ウィリアム「マクマーフィ、病室じゃバスケットはやれないんだぜ」

マクマーフィ「どうしてだ、規則違反なのな？」

ウィリアム「ボールを渡せ」

フリンが入って来る。一同はウィリアムにボールを取られないようにパスする。

ワシントンに続いてラチェッドが入って来る。一

同、硬直したようになる。ラチェッドが舞台前方に進み、ボールを手に行っているウィリアムを見る。ウィリアムはボールとラチェッドとを呆然と見比べる。

ラチェッド「(皮肉に) 結構ね、ウィリアム。ゲームはどうだったの？ (ワシントンに) ワシントン、その可哀相なラックリーさんを降ろしてあげなさい」

ワシントンは、ラックリーを箱から降ろす。

ラチェッドはウィリアムからボールを取りあげ、マクマーフィーに近づく。

マクマーフィー「頭を振りがっかりして」あああ、また俺が怒鳴られるのか……俺はあんたが気に入ると思ったんだ。グループです。こいつあ治療にいいと思ってさ。あんたいつもグループで何かしろって言ってるからさ」

ラチェッド「(静かに) こういう種類のことをいってるんじゃないやしません」

マクマーフィー「(静かに) あんたの好きな事を知るのは大変だよ。あんたを喜ばせようと思うと失敗しちゃうんだ。難しいよ」  
ラチェッド「(微笑んで、和解するように) そんな事ないわ。上手くやれるわよ、今にね。努力してみましようよ。私たちには時間がたっぷりありますからね。もし必要なら何年でも」

ラチェッドはウィリアムとワシントンとフリンを従えて出て行く。

チェズウィック「奴をロープ際までせめこんだな。マック」  
スカンロン「もうグロッキーだぜ」

マクマーフィー「(考えながら緊張して) そうかい」  
ビリー「(嬉しそうに) か、か、考えられなかったよ」

マクマーフィー「黙ってくれよ。奴が何を言いたかったか」  
チェズウィック「何を言いたかったって？」

マクマーフィー「(いらいらして) 奴の手さ。もし必要なら何年でも (沈黙) ……奴は切り札を持つてみたいにいいやつた」

ハーディング「私が思うに……それはあんたがここに拘禁され

るために来たってことだよ」

マクマーフィー「そうさ。だが俺の刑期は後五カ月だけだぜ」

と、マクマーフィーは一同を眺める。一同はもじもじしている。中には何か悪い事をした時のような態度を示している。静かに冷たく。

マクマーフィー「おい、どうしたってんだ。はっきりしろよ」

ハーディング「マック、ここは刑務所とは違うんだ。刑務所じや、いつ出獄出来るかわかる。……でもここはな」

マクマーフィー「奴が離してくれるまで入れられる。そうだな？」

ハーディングと他の連中は黙ったままである。マクマーフィーはひどく動揺している。

マクマーフィー「そうか。あのごりごり女と喧嘩すると、俺はあんたたちと同じように損する事があるんだな」

ハーディング「同じじゃないよ。私たちは自由意志で入ってる」  
マクマーフィー「あんた、ここになんだったって？」

ハーディング「私は拘禁された訳じゃない。ここで拘禁されている者はほんのわずかだ。チーフとそれに慢性患者の何人かはそうかもしれない」

マクマーフィー「冗談だろう。えっ」  
ハーディングは首を振る。

マクマーフィー「皆俺をからかっているんだないだろうな」

答えはない。一同、困惑してマクマーフィーから遠ざかる。

マクマーフィー「ビリー、お前は拘禁されたんだろ？」

ビリー、首を振る。

マクマーフィー「じゃ何故だ、どうしてだ。お前にはお日様の下でオープンカーを走らせて女をひっかける権利があるんだぜ」

ビリーは床を見る。

マクマーフィー「それに皆、皆、何でこんな所にいるんだ。あんたたちはいつも不平を言ってるじゃねえか。病院の事を大嫌いだって。ラチェッドばあさんの事だって我慢出来ねえって……あんたたちはここに残っていなくなっちゃったいいんじゃないか。何で逃げないんだ。今すぐ一緒にさ、ガッツが

ないってのか？」

ビリー「そう、そ、そ、そう。ガ、ガ、ガッツ、ないんだ。ゼ、ゼ、ゼロさ。もしあったら、き、き、きょうでもす、すぐ出られるんだ。(突然乱暴に)僕がここにいたいってお、お、思ってるのかい。ここがき、き、気に入ってるっておもてるの。僕が、オ、オ、オープンカ、カ、カーに女と乗りたくない、な、な、ないって思ってるのかい……あ、あ、あんたは、だ、誰かに、バ、バカにされた事がある？ み、み、みんなから、い、い、いつも……い、いや、ないだろうな、そんなこと。な、何故って、あ、あんたは、ガッツがある、それに、が、が、が、んじようだ。ぼ、ぼ、僕はガッツがないし、が、んじようでもない。ハーディングもそうだ。チエズウィックだって。き、き、気に入ってるから皆ここにいるんじゃないんだ。あ、あんたには、わ、わかりっこないよ！」

泣き出すビリーをハーディングがなぐさめる。

マクマーフィー「(厳しく) OK、何で皆俺に言わなかったんだ」

ハーディング「何を？」

マクマーフィー「俺がくたばるまで、あの女は俺を閉じ込めておくってことをさ」

ハーディング「何故って、あんた知ってると思ってた……」

マクマーフィー「(乱暴に) 馬鹿野郎、ごたごたはもう沢山だ。何でお前たちが俺をまるでイエス・キリストのように取り巻いて泣きごとを言いやがったか今判ったぞ。何故ならば全部失うのは俺なんだ。くそつたれ。俺をかつぎやがって。それとも俺を騙しだましそこなつたかだ」

ハーディング「そんなことはないよ、信じてくれ」

マクマーフィー「(叫ぶ) もう沢山だ」

沈黙。

マクマーフィーは決心して掃除戸棚からブラシを取る。  
る。

ラチエッドが入って来てマクマーフィーを見る。

ラチエッド「マクマーフィーさん」

マクマーフィーは立ち止まり、彼女に近づく。

ラチエッド「そのブラシで何をしようとしているんですか？」



マクマーフィー「使おうと思って、掃除する為にです。ピカピカにして、あんたがトイレに行く度に、まぶしくてサンングラスをかけないといけないようにね」

と、トイレに入って行く。

ラチェッド「(患者の一人一人をじっくり見て)ハーディングさん」

ハーディング「(低く)はい、ミス・ラチェッド」

ラチェッド「ひよっとしてあなた方皆で、マクマーフィーさんに何か言わなかったかしら」

ハーディング「ええ、ミス・ラチェッド」

ラチェッド「何を話したか正確に言っておさらない」

ハーディング「正確と言っても……集団治療について説明したんです」

ラチェッド「ああそう。(微笑む)結構よ、皆さん。大変結構」

チーフを残し、一同、弾かれたように去る。

夜である。コントロール・ルームの配電盤に光が入る。静寂。

チーフ、月光に引き寄せられるように窓辺による。空を見る。

マクマーフィーがやってくる。

マクマーフィー「オイ、チーフ、どうだい」

チーフは動かない。

マクマーフィー「起きたのを見たんでね……ガムでもどうだい。

ミントの味がするぜ」

マクマーフィー、チーフにガムを渡す。

チーフ、ガムを取り、口に含む。

チーフ「……(かすれた声で)ありがとう」

チーフが喋ったのでマクマーフィー、指でチーフを指しにっこりほほ笑む。

マクマーフィーもガムを口に入れ噛む。そして、笑いだす。マクマーフィー、音をたてないように努力して、

小声で、

「ごめんよ、チーフ。あんたの事を笑ったんじゃないんだ。

俺の子供の時の事を思い出して笑ったんだ。俺は七つか八

つ、大不況の頃で家には金がなかった。で、いんげん豆の収穫の仕事に雇われたんだ。カリフォルニアの畑さ。囲りは大人ばかりで、俺は奴らに話しかけようとしたが、聞いちゃくれなかった。無視よ。で、俺は黙って一言もしやべらなかつた。だけど耳だけは開いていた。あのいやらしい六週間全部さ。奴らは俺が喋るなんて忘れちまった。最後の日、給料をもらう時に俺はばらしてやった。女房たちが何をやってたか、その亭主も何をやってたかってな。そして血の見たのよ……そうやってんだろ、チーフ。全部ばらしちまうチャンスをまってるだろう。そうだろ」

チーフ「(しわがれたつぶれた声で話しているが、舞台が進行するにつれ、はつきりとして来る) いやや恐くて出来ないよ」  
マクマーフィー「恐い、お前が？ ビック・チーフがかい。」

チーフ「僕はちいとも大きくない」  
マクマーフィー「何言ってるんだい。お前の眼を見りゃわかる。モヒカン族の血を引くビククな根性を持っている奴だっとな」

チーフ「パパは本当の酋長でビククだったよ。でも奴らがなにもかも取りあげてしまった」

マクマーフィー「奴らって誰の事だ？」  
チーフ「組織だ。奴らは僕らを追い出したかったんだ。何度もパパを襲った。殴られ髪を切られ。長い間パパを打ちめした。そして、パパは書類にサインしたんだ。土地も俺も村も全て政府のものになった……そして、僕らの村がダムになる頃、パパは町の酒場の裏で死んだ……(怒り) 奴らが殺したんだ！」

マクマーフィー「落ちつけ、チーフ」  
チーフ「もし身を守ろうと抵抗すれば逮捕されブタ箱に入れられてしまう」

マクマーフィー「(チーフの口を塞ごうとする) 興奮するなよ、大声だすなよ」

チーフ「僕が気狂いみたいに皆に喋ると思ってるのかい……」  
マクマーフィー「いや……まあ……」

チーフ「あんたにとって何の意味もないことなんだろうな、こ

んな事」

マクマーフィー「どんでもない。……だから俺は……」

チーフ、何か憑かれたように顔を輝かしの窓辺へ行く。

マクマーフィー「おい、どおしたんだ？」

チーフ「しつ。聞こえるだろう？」

マクマーフィーはチーフの傍らに行く。

チーフ「雁かりの鳴き声だ」

二人は鳴き声に耳を傾ける。

マクマーフィー「本当だ、カナダから南へ飛んで行くんだ」

チーフ「冬が近いんだ」

マクマーフィー、窓の外を指し、

「見ろよ、チーフ。ほらあそこだ。見ろ、月の真中を横切つて行く……三羽いるぜ……一羽はきつと東へ行くんだ」

チーフ「一羽は西だ」

マクマーフィー「それでもう一羽は……カッコーの巣をこえて」

一同、どつと出て来る。

フリン「コントロール・ルームのマイクで」委員会の時間です。

患者委員会の時間です」

ラチェッド、出て来る。

ラチェッド「皆さん、お話したい事があります。いいえ、話さなければならぬ事です。それは私と同じぐらい長い事ここにいる一人の患者の行動についてです。あなた方の誰よりも長くここにいます。(微笑んで)誰の事を話しているのか皆さん勿論を判りね」

患者たち互いに探り合う。そして、一人一人チーフの方を振り向く。

ラチェッド「その通りです。プロムデンさんの状態については、相当前に診断が出ています。緊張病であり、早発性痴呆症そうはつせいちまじょう……

……即ち、精神分裂病の進行状態。それにプロムデンさんは、聴覚の喪失というものが附随しています。その理由で私たちは彼とのコミュニケーションがつけられないと思つていました。その為、皆あの可哀相なプロムデンさんに関心がなくなつてしまつていたのです。それは大変悪い事で、私

たちの間違いでした」

チーフ、だんだん不安の眼差し帯びてくる。

ラチェッド「(熱意のこもった頬笑みをなげかけ)でも、プロムデンさんの行動も大変悪かったです。皆さんプロムデンさんの耳は聞こえるのです」

一同、動揺。

ラチェッド「なら喋る事も出来ると言う事は非常に論理出来ないことだと思いませんか？ 私たちはプロムデンさんと意志を通じ合える可能性があると思うてよろこんでいます。ですが、彼がそれを隠していたのは残念なことです。自分の病気を完治させる為に私たちとの協力を拒絶していたからです。長い間ずっとね。私と同様、皆さんも、プロムデンさんは喋らねばならないと思いませんか。それも彼の最初の言葉が謝罪だったら素敵ね」

チーフ「(恐れて) マック」

患者たちチーフが喋ったので、驚く。

ラチェッド「ワシントン」

ラチェッド、指を鳴らしチーフを指す。ワシントン震えるチーフの所に行こうとするがマクマーフィが足を引つ掛けられ倒れる。

ラチェッド「マクマーフィさん！」

マクマーフィ、ワシントンとチーフの間に入り、

「奴を放っとけよ」

ワシントン「どいてろ！」

マクマーフィ「マクマーフィさん、言つときますが……」

ワシントンが再度チーフに向かう。マクマーフィがワシントンを止めようとする。ワシントン反撃、マクマーフィの胃にパンチを浴びせる。マクマーフィ倒れる。ワシントン、マクマーフィを足蹴にする。マクマーフィの手からカードがばら撒かれる。

ワシントン「さあ来い、お前からしかけた喧嘩だ！」

ワシントンさらにマクマーフィを蹴り上げようとするのをチーフがワシントンを羽交締めにする。

ワシントン「チーフ、何をする話せ！」

マクマーフィー、ワシントンに殴りかかろうとする。

一瞬、一同ストップモーション。

マクマーフィーとチーフはスローモーションのように後手を縛られた格好で並んで直立不動の姿勢になる。

一同は影のように去る。

マクマーフィー「酋長。俺は決して忘れやしないぜ。そうさ。(笑いなながら)お前がワシントンをベアハッグしてつかまえた時の奴の顔。お前が放さないものだから脚をばたつかせてさ」

チーフ、かすかに微笑む。

マクマーフィー「さあ、笑えよチーフ。人間て奴はいつも笑ってなけりやいけないんだ。特におかしくない時はいつもな」

マクマーフィー、肩でチーフをこずく。チーフが気づいてマクマーフィーと同じようにこずく。二人は後手に縛られたまま肩をこずき合って遊ぶ。二人は笑う。マクマーフィーはチーフより強く笑う。

マクマーフィー「チーフ、お似合いだぜ」

チーフ「何が？」

マクマーフィー「その拘禁服がよ」

チーフ「あんたもよく似合うよ」

二人はまた笑う。

ラチェッドがワシントンとウィリアムを連れてやって来る。

ラチェッド「何がそんなにおかしいんです？」

マクマーフィー「少し、興奮気味だね」

ラチェッド「さて、二人ともご自分たちがやった事を悔やんでいませんか？」

マクマーフィー「いいえ、どんでもない。さあ、あなたたちのいやらしい仕事を片づけちゃってくださいよ」

ラチェッド「マクマーフィーさん。私たち委員会の意見としてあなたに電気ショックをするのが大変良いと考えています。

しかし、強制的にしようとは思いません。あなたが自分の

間違いを認めたら中止します。私たちはあなたを助けたいのよ」

マクマーフィー「ナチの連中でも、あんたにあつちや真青まっせおだろうな。婦長さんよ」

ラチェッドはワシントンに合図をして出て行く。

ワシントンがマクマーフィーを押さえる。

チーフ「厭いやだ！」

マクマーフィー「恐がるなよ、チーフ。こん畜生、今日は聖なる

金曜じゃねえか」

ウィリアム、マクマーフィーのこめかみに綿をつける。

マクマーフィー「何だこりゃ」

ワシントン「……伝導体だ」

マクマーフィー「そうかい、技術革命ツて奴は人生を楽にするんだな」

チーフ「厭だ、マック。俺は厭だ！ パパ、パパ」

マクマーフィー「めそめそするなよ、酋長。これはいばらの冠かんむりじ

やねえか」

チーフ「厭いやだ！」

マクマーフィー「そうだ。何か言いたい事があつたら、叫べ……

見ろ、チーフ、空に三羽の雁かりが飛んでいるぜ！」

スパイビイはゴムで出来た猿ぐつわをマクマーフ

イの口に押し込む。

マクマーフィー「一羽は東だ……」

マクマーフィーとチーフ、

「一羽は西へ……」

スパイビイが電源のスイッチを入れる。

激しく白い閃光。

チーフの声を押し消すように、耐えがたいエレク

トロニックサウンドが辺りに響き渡る。

チーフ「(泣き叫ぶ) 一羽はかつこうの……!!」

——急激に暗転

——明転

患者たちが緊張して何かを待っている。

固まってお互いに低い声で話し合っている。

ラチェッドがスパイビィ医師を従えて入って来る。

一同、話を止める。

ラチェッド「皆さん、皆さんがとても興味ありそうな報告書が

ここにあります。またまた、パトリック・マクマーフィさ

んに関するの事ですけどね」

スカロン「彼をどうしたんだ？」

チェズウィック「狂暴性患者の所に廻したのか？」

ラチェッド「いいえ、彼は今まで休養室にいて……今あなた方

の所に戻って来ます」

マクマーフィとチーフがワシントンとウイリアム

に押されて部屋に入って来る。チーフの虚ろな視

線は仲間の患者たちを据えられている。マクマー

フィは精神肉体共空になったように佇んでいる。

一同、沈黙。

チェズウィック「……マック」

一同、言葉が出ない。

その時、マクマーフィ、両手でVサイン。

マクマーフィ「ヤーイキ印じろしども、頭ザが高い、下がりおれ！ 俺

様は真つ赤なマクマーフィ様だあ。一万ボルトの精神病患

者のチャンピオンだ。たととバッテリーにチャージしてき

たぜ。オス、皆。オス、ヤブ医者。さて、紳士しんししゅくじよしよん淑女諸君。

ここにいるのは、野蛮人。高圧電流の風呂に入る巨大なカ

バでござーい」

マクマーフィ、弱々しく佇むチーフ近づき、その

腕をあげさせる。チーフな何かぶつぶつ言ってい

たが、しまいに微笑む。

ラチェッド「マクマーフィさん。治療が大変お気にめしたよう

ね」

マクマーフィ「まったく、俺にソケットを付けてくれりゃ、病

院中の明かりをつけてやるぜ」

ラチェッド、スパイビィ医師に、

「スパイビィ先生、外科手術を考えた方が賢明かと思いま  
すけれど」

マクマーフィー「何だそりゃ？」

ラチェッド「それでは皆さん。おとなしくしてね」

ラチェッドたち出て行く。

マクマーフィー「外科手術ってのは何のこっちゃい」

ハーディング「(動揺して)……その……彼女の言ったのは“ロ

ボトミー”じゃないかと」

マクマーフィー「ロボトミー？」

ハーディング「……一種の脳髄去勢だ。ラックリーは知ってる

な」

マクマーフィー「あの、よだれた涎垂らして、いつも小便でズボン濡らし

ている奴だろ」

ハーディング「あいつは頭が良くて頑丈な男だったんだ」

チェズウィック「奴は民主主義社会の規則を守らなかったって

訳だ」

ハーディング「俺たちは君の事を話し合っていた。君はここか

ら出て行かなくては。それも早く」

チェズウィック「俺はどうやったらいいか考えたんだ。病室に

いる時、俺がマットに火をつける。消防夫がやってくる。

奴らはドアを開けたままだ……それであんたが」

スカロン「それから、こんなことも出来る……」

マクマーフィー「(さえぎって)皆、ありがとう……でもよ、パー

ティふいにするわけにやいかなからな」

ハーディング「何のパーティだい」

マクマーフィー「何だい、忘れちゃったのか、祭りだよ。盛大な

パーティだ。それにビリーの童貞喪失を祝賀会も兼ねてる。

そいつを見逃すって思うかい」

ハーディング「マック、私は……」

マクマーフィー「いいから、いいから。俺の為に悩まないでくれ

よ。今夜、その窓から女たちが入って来る。そして、俺が

そこから出て行くんだ。俺の旅立ちを祝うのに退屈はさせ

ないよ」

一同、みを隠すような姿勢になる。

マーティニ「……お祭りはどこだ」

マクマーフィー「あの中でやる。ハーディング、鉄格子と窓を開



けてくれ。鍵はこれだ、守衛はたらしこんだ」

ハーディングが窓の外にいる女たちを見つける。

ハーディング「女たちが来てるぞ」

マクマーフィー「早く入れてやれよ。この赤ちゃんが始めて授業をくけたくてじりじりしてるからな」

ビリー「マ、マ、マ、マ、マクマ、マ、マ、マーフィー。ぼ、ぼ、ぼ、僕……」

マクマーフィー「何だい、マママママクママーフィーとは。今日はお前の記念日だ。俺に感謝するぜ」

キャンディとサンディ入って来る。

二人はかなり酔っている。

キャンディ「マック、抱いて！」

マクマーフィー「何でー、かなり出来あがってるな」

サンディ「こんちわ、マック」

マクマーフィー「紳士諸君、サンディを紹介する」

サンディ「ハロー。キャンディ私たち本当に精神病院にいるの？」

あなたたちが狂ってるなんて思えないわ」

マクマーフィー「おい、お前の亭主はどうした？」

サンディ「あんな厭な奴のことなんか金輪際言わないで。奴は

コールドクリームの中に虫を入れたり、ブラジャーの中に

カエルを入れられちゃたまないわよ。全くあの異常男。

あんたたちの方がどれ程正気かしれやしないわ」

ハーディング「(馬鹿をよそおって) とんでもない。ケケケケ。

俺たちは完全に異常極まりない連中でチュ、マダム。我々は社会の恥、世界のカス、文明から見捨てられた者、ひびの入った脳髓のうずいの国家労働組合でチュー」

サンディ「あらまあ、まあ。キャンディ、こんな所にやって来るのは、私たちぐらいね」

マクマーフィー「つべこべ言わないで……(酒瓶を翳して・無対象)さー、皆、お菓の時間です。一同、酒瓶を手にとって、

乾杯！」

一同「乾杯！」

チェズウィック「さあ、バーの開店だ。ビック・マックパーティーだ！ (プロなみの手さばきでカクテルをシェイクする

(無対象) さて、お得意のカクテルはその名は “ 精神病の夜 ” 味わってくれ」

と、一同のコップに注ぐ仕草。

ハーディング「うまいぜ」

サンデイ「咳どめの菓みたい」

マクマーフィ「さあ、良い物を見せてやろうか、ほれ」

と、何かを翳す。

チエズウィック「……おつ、ファイルだ。見せてくれ、俺は常

日頃からこの奴らが俺の事をどう思っていたか知りたか

ったんだ。(読む) さて、あれまあ、俺は良く思われてない

ぞ」

スカンロン「俺もだ」

フレデリックス「(読んで) 奴らは狂ってる」

ハーディング「この気狂いカクテルは私に変な気を起させる」

マクマーフィ「もう臆病な兎じゃないかい？」

ハーディング「君は私に重要な事を判らせてくれたよ。権力と

言うものは狂気の顕れであること、それは狂えば狂うほど

強力になるんだ」

スカンロン「そうだ、ヒットラー」

キャンデイ「踊らない、ビリー」

音楽が鳴り、二人は踊りはじめる。

マクマーフィ「ビリー、隔離室の鍵だ。これ以上いいホテルは

見つからないぜ」

チエズウィック「壁は防音だし、マットレスもある」

ハーディングが立つ。

マクマーフィはビリーとキャンデイを押す。

ハーディングの前に二人は手をつないで立つ。

他の連中は一塊になる。

サンデイは極当たり前にキャンデイの側に行く。

ハーディング「我が親愛なる子供たち。我々はフロイトの眼差し

の下に、一人の無垢の犠牲者とマザー・コンプレックスを

葬る為にここに集まりました。誰がこの小羊の証人かね」

マクマーフィ「(一歩出てビリーに傍らで) 私です」

ハーディング「誰がこの小鳩の証人かね」

サンデイ「(キャンデイの傍らに寄り)私」

ハーディング「よろしい。キャンデイ、あなたはこの男性に身をまかせ、我々がしばしあの素晴らしい規則の事を忘れる間、彼を愛し、いたわることを受け入れますか？」

キャンデイ「はい」

ハーディング「ビリー、あなたはこの女性を受け入れなすか」

ビリー「は、は、は……」

マクマーフィ「はいということです」

ハーディング「今まで我々にお慈悲を下さらなかった神よ。この二人の子供たちをあなたのお国へ受け入れて下さい。あなたをよく知られているところのお慈悲を持って……。二人を受け入れて下さったら、我々にも少し天国の扉を開いておいて下さい。何故って、それは我々の示す最後の狂気きょうきかもしれないからです。というのは、今後我々は理性と精神衛生のひどい重荷を背をわされるからです。日が昇ると我々は壁にならばされ、鎮静剤で銃殺される可能性大なのです。さあ子供たち平和を乱すがいよ」

一同は結婚行進曲を歌う。ビリーとキャンデイは  
チェズウィックとスカンロンが両手で作ったアー  
チの下をくぐり抜ける。

マクマーフィは退場する二人に錠剤をまく。

サンデイがすすり泣く。

マクマーフィ「おい、どうしたんだよ？」

サンデイ「あたしの馬鹿ばかりしい結婚式より、ずっといいからよ」

ハーディング「さみしくなるな、マック」

他の連中も同意する。

マクマーフィ「何で皆俺と一緒に来ないんだ。あんたらを罫わなにかけたのは誰だい？」

ハーディング「私には判らないよ、判らん。だが、強い連中を気狂きょうがいにさせちまう奴らは知っている」

マクマーフィ「どいつらだ？」

ハーディング「俺たちだ……」

その時、ラチェッドが奥に立つ。

ラチェッド、眼前の光景に我と我が身を疑っている。

患者がラチェッドの徐々に気づく。

ラチェッドとマクマーフィーの眼が合う。

マクマーフィー「こんにちわ美女さん。祭りは続いているんだ。

一緒にどうだい？」

ラチェッドは消える。

ハーディング「マック逃げろ。早く逃げてくれ」

マクマーフィー「かなり酔っている」待てよ。仲間にさよならを

言わない訳にはいかないよ」

ハーディング「早く、サンデイ、マックを連れて逃げろ」

サンデイ「皆、さようなら、とても楽しかったよ……マック早

く」

マクマーフィー、慌てることなくハーディングに握手して、

「皆最高の仲間だったよ（チーフの手を握り）お前大丈夫か。上手くやるんだぜ」

ハーディング「マック、早く外に行くんだ」

マクマーフィー「ちよい待ち、ちよい待ち。チーフ……忘れない

ぜ……俺の事も忘れるなよ」

ワシントンとウィリアムが入って来る。ラチェッドは後ろにいる。

ラチェッド「皆うごかないで、じっとしていなさい。全部の部屋をチェックするんです」

ワシントンは廊下の方に駆けて行く。

マクマーフィーは窓の方に行こうとする。

ウィリアム「待てッ」

ラチェッド「いいえ、行かせなさい。彼のような人間には希望なんてないんです。マクマーフィーさん、いつか社会があなたをつかまえて、ここよりひどい所に入れる事になるでしょう。さあ、何を待ってるの。欲しいものは手に入れたでしょう。この可哀相な人たちからもっとまきあげたいんですか」

マクマーフィー「（ふき出して。患者たちにラチェッドを指さし）

皆に残しとくぜ。壊すなよ。彼女はユニークだからな。あ  
ばよ」

マクマーフィ逃げようとする、ワシントンがビ  
リーとキャンディを引っ立てて来る。

マクマーフィは動けない。

ラチェッド「何処にいたの？」

ワシントン「(にやにやして) 隔離室の床に」

ラチェッド「ああビリー、何て恥ずかしい事を……」

ビリー「(どもらず自信を持って) 僕は全然」

マクマーフィ「ブラボー、ビリー(役者によって「坊ず」)！」

ラチェッド「ビリー、こんな女と」

ビリー「こんな女？」

ラチェッド「不潔で下品で……」

ビリー「彼女は親切で優しい」

ラチェッド「あなたの可哀相なお母様の事を考えましたか」

ビリー「か、か、か、かあさんには関係ない」

ラチェッド「あなたの純潔さをいつも自慢してらっしゃったお母

様よ。その方にあなたは何をしたら考えましたか？」

ビリー「……(崩れ折れるように) い、い、いわ、わな、な、

ないで。お、お、おねがいだ、だから、か、か、かあさん

に」

ラチェッド「ビリー、私には義務があります。あなたとその女

が何処で何をしていたか」

ビリー「ゆ、ゆ、ゆりして、ゆ、ゆ……」

ラチェッド「彼女が隔離室に連れて行ったんじゃないんでしょ

う」

ビリー「(激しく) そう。ほ、ほ、ほかの、れ、れんちゅうが、

ぼ、僕を、け、けいべつして……」

ラチェッド「誰があなたを軽蔑したの？」

ビリー「み、み、み、みんな、みんなが……」

ラチェッド「誰なの。ビリー！」

ビリー「ま、ま、まく……マクマーフィ」

マクマーフィ「(落胆して) ビリー」

ビリー「か、かれがからかったんです。ぼ、ぼくのことを」

ラチェッド、床に倒れるように座っているビリーの髪を撫で、

「落ち着いて、もう誰もあなたを軽蔑したりしません。私がお母様にすべてをご説明しますから、判って下さるわ」

ビリー、弾かれたように立ち上がり、部屋を出て行くとする。が、ラチェッドに振り返り、

「か、か、かあさんには、な、な、なにもいわないで」

ビリー、部屋を出て行く時、マクマーフィと視線が合う。しばし二人は見つめ合う。そしてビリーは逃げるように部屋を出て行く。

ワシントン「(キャンディに) さ、あんたも来るんだ」

マクマーフィ「手を出すな」

と、キャンディをかばう。

ラチェッド「マクマーフィさん、病院の委員会が明日、必要な処置をとるでしょう。ワシントン、ウィリアム、皆を病室

へ」

スパイビー医師が駆けこんで来る。

スパイビー「ミス・ラチェッド、早く、ビリーが！」

ラチェッドたち慌ただしく出て行く。

ハーディング「マクマーフィ、今だ窓は開いている早く逃げ

ろ！」

マクマーフィは窓の方を向き躊躇する。

マクマーフィは逃げたい気持ちとビリーに何が起

こったのかを知りたいきもちとの相克に悩まされる。

マクマーフィ「あの坊ず(「ビリー」)に何があつたんだ？」

マクマーフィ、床に座り込み……待つ。

ラチェッドが入って来る。

ラチェッド、マクマーフィを睨み近づく。

マクマーフィ、立ち上がる。

ラチェッド「彼は頸動脈を切り裂いたわ」  
けいどうみやく

マクマーフィは無言である。

ラチェッド「あんたが殺したのよ！」

マクマーフィ「あんたがそれを言うつてののかい」

ラチェッド「あなたの責任よ。あなた一人の、あなた一人の……」

マクマーフィ「(怒号) 何度も言うな！」

ハーディング「(叫ぶ) 駄目だ、マック。それが彼女のつけ眼なんだ」

マクマーフィ「俺が知らないとしても言うのか？」

ラチェッド「あなたがビリーを殺したのよ。マクマーフィさん」

ラチェッドは尚もマクマーフィに近づく。

ラチェッド「さあ、やってごらんさい。勇敢で……男性的な

マクマーフィさん。さあ！」

マクマーフィ、いきなりラチェッドの首を絞める。

が、間、髪を容れぬ速さでワシントンとウィリア

ムがマクマーフィに飛びかかる。

——カット・アウト

明りが入るとテーブルで患者たちがカードをしている。

ハーディング「(カードを配りながら、マクマーフィを真似て)

さあさあ、鳩ポツポ、ブラック・ジャックのおでました。

賭けるかおるるか。ほいよ。もう一枚。十じゅうと出たな。親の

勝ちだ」

チエズウィック「おい、スカンロン何ボヤーってしてるんだ？」

スカンロン「もう、一週間にもなる」

ハーディング「何がよ？」

スカンロン「マクマーフィさ、彼に何をしたか？ 彼を何処へ

やったか？」

チエズウィック「ある男が食堂で言った事を知ってるかい。マ

ックは看護人二人をぶん殴って鍵をかつぱらって逃げたっ

て」

フレデリックス「マックのやりそうなことだ」

マーティニ「いや、誰かが言ってたが、奴らはマックをつかま

えて強制労働の農場に送ったって」

チエズウィック「誰が言った？」

ハーディング「作業療法室の狂ってる奴が私に言ったんだが、

マクマーフィは羽をはやして、病院にフンをひっかけなが

ら、空中に輪をかいて飛んで行ったそうだ」

フレデリックス「ミス・ラチェッドが戻って来るのかい？」

ワシントンとウイリアムが入って来る。ラチェッ

ドが続く。首に包帯をしている。彼女は変わった。

より、神経質に不安そうに見える。

ラチェッド「皆さん、眠らなければならない時間です」

チェズウィック「ミス・ラチェッド（つと前へ進む）」

ラチェッド、反射的に一歩下がる。

チェズウィック「我々は知りたいのです」

ハーディング（非常に丁寧に）マクマーフィがこの病室に戻っ

て来るかどうか知る権利があると思います」

ラチェッド「もちろんです」

スカンロン「それじゃ？」

ラチェッド「彼は戻ってきます」

一同は信じられないという風である。

チェズウィック「いつ」

ラチェッド「私を信じないのですか？」

ハーディング（悠然と）あなたの言う事を信じなくなってから

かなりたちますよ」

チェズウィック「それは大変治療によくない」

ラチェッド「皆さん、本当に心配はいりません。マクマーフィ

さんは戻ってきます。だから今はベッドに入りなさい」

一同、病室の方に静かに行く。

ラチェッド、一同が去るのを待って、ワシントン

とウイリアムに、

「連れて来なさい」

ワシントンとウイリアムが出て行く。

ワシントンとウイリアムがマクマーフィを抱えて

入って来る。

マクマーフィは人間ではない。魂のない人形によ

うなマクマーフィが歩いている。

マクマーフィが止まる。

ラチェッド「それで結構よ」

ワシントンとウイリアムはマクマーフィを残し部



屋を出て行く。

ラチェッドはマクマーフィの傍らに立ちゆっくり眺めると、満足げに笑みを浮かべ、

「大変結構というべきね」

ラチェッド、出て行く。

チーフが出て来て、マクマーフィ気づき近づく。

病室からチェズウィック、スカンロン、マーティ

ニ、フレデリックスが出て来る。

一同はマクマーフィに近づく。

チーフ「……これはマクマーフィじゃない」

マーティニ「そうかい」

チーフ「地下にある工場から出て来たマネキン人形さ」

スカンロン「そうだと、すぐに判ったよ。奴らは何でこれが

マクマーフィだって俺たちに信じ込ませようとしたんだろ

う？」

チェズウィック「しかし、うまく真似やがる。見ろよ、この鼻

の恰好かっこうなんてそっくりだ」

マーティニ「刺青いれずみもそっくりだ」

チェズウィック「刺青何かが一番真似やすいからな」

フレデリックス「でも、眼はこんなじゃなかったぜ」

チェズウィック「見てみるよ。どこを見てるか判らねえ」

スカンロン「マネキンだからな。空っぽなんだ。魂がねえんだ」

チェズウィック「彼女は俺たちがこんなもんで騙せると思った

んだ」

スカンロン「彼女は俺たちが本当の気狂きちがいのように扱ってるん

だ。馬鹿にしゃがって」

チーフ「このマネキン人形を横にしな。スカンロン、枕を持つ

てきてくれ」

マーティニ「何するんだ、チーフ」

チーフ「マックの名前をくっつけたこんな野郎が、ここによ、

二十年も三十年も放つたらかさされているのを、マックが見

て喜ぶとも思ukai」

スカンロン、枕を持って来てチーフに渡す。

スカンロン「で、何するんだ」

チーフ「いいから、あっちにいったら、俺を見るなよ」

一同、窓の方に行き、チーフのすることを無視する。チーフは身をこごめ、マクマーフィの顔に枕を押しつける。

マクマーフィは苦しくて身もだえする。

マーティニ「(スカンロンに)俺は本当のマックに帰って来てもらいたいんだ」

チェズウィック「(明るく)マックがミス・ラチェッドのケツをつねった日の事覚えてるかい。スキンシップだって言うてたっけ」

スカンロン「(けらけら笑いながら)あいつが、日誌に書いた事と言ったら“看護師さん、あなたのブラはBカップですかCカップですか、Dカップ外の特大ですか”」

皆笑いだす。

チェズウィック「それから食堂で、奴が壁にバターを投げつけて、バターが何分で床に落ちるか賭けたっけな」

マーティニ「それでマックは勝った」

スカンロン「彼はいつも勝つのさ。凄い奴だ」

チェズウィック「俺は彼が逃げたんで、とても満足してるんだ」

パジャマに着替えたハーディングが出て来て彼らを見て驚く。

ハーディング「皆どうしたんだ。戻って寝た方がいいよ。じゃないと(突然チーフのしていることに気づく)チーフ、何を……」

チーフはハーディングを乱暴におしのける。ハーディングは尚もチーフに飛びかかり中止させようとす。

ハーディング「駄目だ、チーフ、止める！ (他の連中に叫ぶ)こつちに来て手を貸してくれ！」

ハーディングはついにチーフを引き離し、枕を取りあげる。チーフは床に尻餅をつき、動かない。

ハーディングはマクマーフィの脈を見る。

マクマーフィは死んでいる。

ハーディング「ああ、何て事を！」

チーフは子供の様に泣き出す。

ハーディング「(叫ぶ) チーフ！」

他の連中は反応を示さない。

ハーディングはチーフのマクマーフィに対する思いを理解する。

ハーディング「スカンロン、早く私のレインコートを持ってきてくれ」

スカンロンは病室に走る。

チェズウィック「……お前さんは正しいよ。チーフ」

泣き続ける、チーフ。

スカンロンがコートを持って来る。

ハーディングはチーフの肩にレインコートを掛けてやる。

ハーディング「さあ、チーフ、行くんのだ」

スカンロン「おい、ちよつと待てよ！」

ハーディング「チーフがいなければ、何も証明できない」

マーティニ「チーフは悪くない」

チェズウィック「(チーフに) 手術の後で死ぬ事はあるんだ」

フレデリックス「俺たちは喋りやしないよ」

ハーディング「そんなことは判ってる。でも、チーフは喋るよ」

スカンロン「お前が出て行った時、マックはまだ生きていたって皆で言うよ」

ハーディング「いいかチーフ、ハイウェイに出て、車に乗せて

もらえ。北へ行くんだ。カナダへな」

チーフは頭を振る。

チーフ「恐い……駄目だ。俺は小さすぎる」

ハーディング「違う……君は今大きくなった。マックはきつと君の事を誇りに思うよ」

チーフはハーディングを見つめ、

「あつちには滝があるかい」

ハーディング「沢山あるさ。いい滝を見つけるんだ……チーフ  
行け！」

チーフ、立ちあがりマクマーフィを見つめる。

チーフ「……マック、一緒に行こう！」

準備稿 1

E  
N  
D

ラチェッド「黙らせる為に大仰に手をあげる」この病院の規則は長時間にわたり研究され出来あがったものです。あなた方の大半は、外の世界に適応出来なくてここに来たのです。このような所で秩序を保つという困難を理解して頂きたい。何かあった時、私たちはどうすればいいでしょう？ 逮捕する事も病院に送り込む事も出来ません。しかしあなた方の特権を取りあげる事はできません。ルールは秩序と風紀を強化するためというより、あなた方のためです。その事をよく考えて下さい。

——暗転

♪ マクマーファイが歌っている。

♪

リリアンが言った

お前の馬は腹ペコだ

♪ ここに来て座ってまぐさを食えよ

♪

——明転

♪ マクマーファイが居て、歌が続く。

♪

まぐさはいららない満腹だ

♪ 長い道を帰るのさ

♪

ウイリアムとワシントンが来る。

マクマーファイ「おはよう、歯を磨きたいんだけどよ。歯磨きは何処だい？」

ワシントン「戸棚は六時四十五分まで開かない」

マクマーファイ「歯磨きに鍵がかかっている？ ということは、

あれは危険物？」

ウイリアム「規則だな」

背を向けていた一人ハーディングが振り返り、

「何故？ 世界は強い奴らのもので、弱者じゃくしゃのものじゃないんだ」

一同振り返る。

ハーディング「ウサギは狼の力を知っている。だから、狼がうるついている時は穴の中に隠れてる。マクマーフィさん、私は牡鶏おんどりじゃない。ウサギなんだ。チエズウィック君もウサギなんだ。ビリーもウサギだ。ここにいる皆、ウサギがギがそこら中に飛び廻っているんだ」

マクマーフィ「あんたたちをウサギに変えたのがあの婦長って訳か？」

ハーディング「変えた？ いや、私は生まれつきウサギだ。

だから、私を幸せなウサギにしてくれる偉大な婦長が必要なんだ」

チーフ『『ここでは目立ってはいけない』』

一同、ぐるぐると舞台を回りだす。

チーフ「だから奴らの霧の事に文句を言わないんだ。その中に隠れることなんだ。それしかない……』」

マクマーフィのみ舞台から去る。

ラチエッドが居る。

ラチエッド「皆さん、あの人がいらない間にちよつとした会合を  
したいと思うのよ」

チエズウィック「どこにいるんだ」